

合理性は言葉の必要条件ではない。

「青い黒板」という言葉があります。これを不合理な言葉だと責める人がいます。確かにそれは不合理だと言えます。それでは、これを「青板」と改めるべきでしょうか。もし、そう主張する人があるなら、それは、言葉というものの本質を知らない人だと思います。なぜなら、「美子」とか「麗子」とか言う、醜いおばあさんがいても、それを怪しまないのと同じようなものです。いかに醜いからと言って、「醜子」と改めなさい、とは誰も言わないでしょう。

「黒板」は、「黒」と「板」とから成る言葉で、文字の上から見れば、「黒い板」ということですが、しかし、これは初めから「黒く塗った板」と言うだけの物ではなかったのです。「白墨を使用して、容易に書いたり消したりできる板」に命名するのに、その用途や本質の面よりも、一見ただけですぐわかる「板の色」を取って、「黒板」と名付けたものなのです。だから、青く塗り代えても、用途や本質に変化がない以上、「黒板」と呼んで、誰も怪しまないわけなのです。

これは「白墨」という言葉についても言えます。「墨」は元来、「黒」と「土」とより成る字で、黒い物であるが故に、この字が作られました。し

かし、色の黒は、やはり命名に利用されただけで、その本質までを表したものではありません。だから、朱色であれば、これを「朱墨」と呼んだのです。

同様にして、「白墨」も、論理上不合理だと言え、確かにそれに違いありませんが、「朱墨」と同じように、生れるべくして生れた当然の表現と言えるのです。そして、更に、この「白墨」の「白」も、その本質を言ったものではありませんので、「青い白墨」「赤い白墨」という言い方も生れたのです。

この「青い黒板」や「赤い白墨」という言い方には、言葉や文字というものの本質を、よく表している所があると思います。黒板の「黒」が、黒板の本質を表すものでないということが、「青い黒板」という使い方をしているすべての理由では決してありません。それだけだったら「青板」という言葉が生れても悪いわけではないのですが、言葉や文字の世界では、**長い間使用されて来たものの力**が大きく物を言うのです。言葉や文字の目的からして、それが一つの概念を表して変らないことが必要です。つまり、言葉や文字は、恒久性・普遍性が、何よりも必要な本質なのです。故に、「青板」という新しい言葉では、長い歴史を持つ「黒板」の効果には、とても太刀打ちできないのです。つまり、

青板」の**合理性**を以てしても、不合理な「青い黒板」の持つ「**歴史性**」の力に打ち勝つことができないのです。このように、**言葉や文字の世界では、合理性より歴史性の方が重要である**点を、よく認識しなくてはならないと思います。

私たちは、漢字の「いち」を書く時は、横に棒を引いて、「一」と書きます。決して縦には書きません。縦に書くのは、ローマ字の「I」です。アラビア数字は、斜に傾けて書きます。棒一本で「いち」という数を表した点では、三者は皆同じですが、その書き方は、三者三様です。棒一本で「いち」を表したことには理屈があります。だからこそ、三者が同じなのです。しかし、それを横に書くか、縦に書くか、斜に書くか、ということになりますと理屈はありません。だから、三者が三様、皆違っているのです。

理屈を言えば、棒を縦に引こうが、横に引こうが、どうでもいいはずですが。しかし、それにもかかわらず、私たちは、漢字の「いち」を書く時には「一」と書き、ローマ字の「いち」を書く時には「I」と書きます。そして誰もこれに疑いを抱きません。一体、それはどうしてでしょうか。昔から今に至るまで、自分も含めて、世の中の人々が皆そう書いているからです。「世の中の人々が、皆そう書いている」「私は、今までいつも

そう書いて来た」だから、今もそう書いているのであり、これからもそう書くに違いないのです。理由と言え、ただそれだけが理由です。しかし、この理由にもならないような理由が、文字や言葉の世界では、自然な考え方なのであり、正しい考え方なのです。文字とは、元々そういうものなのです。それは理屈で説明の付く点もあります。しかし、理屈だけで左右できない所に、むしろ文字の真面目があると思われ

「長い長い時間を経て来た言葉の、何という美しいことか。そこには、人々の喜びの声も、絶望の吐息も、夢のささやきも秘められていて、同時に聞きなされる」

「私たちの祖先の感情の脈打っている言葉だけが、自分の思想をしっかりと表現することができる」と言って、アナトール・フランスは、古い言葉を讃美しています。古い言葉、伝統ある言葉、これこそ美しい言葉、正しい言葉の基準なのです。

「青い黒板」「漢字の一の横書き」これらを通して、**言葉や文字が、過去の習慣や歴史を背負って生きているものであり**、単なる一片の理屈や理論で左右されるものではないことを、私たちは知ることができます。